

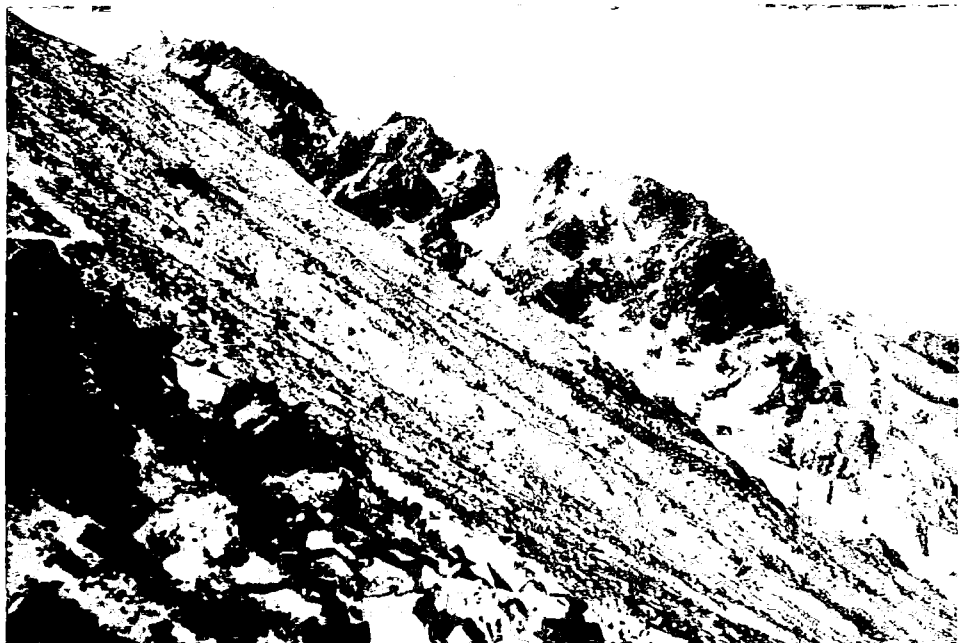
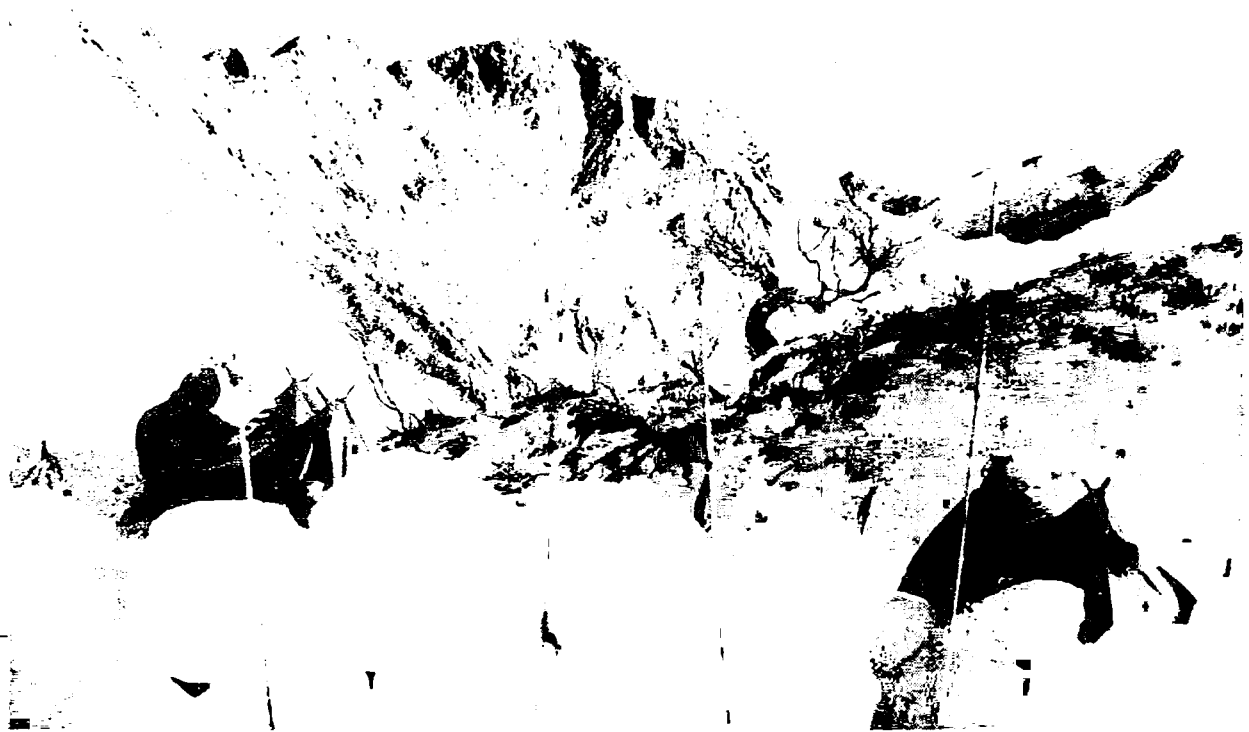
西朋

都立西高山岳部OB会

1957・MAY

12号

西朋登高会



A Cより岩小屋沢岳 (上)

夏路よりスバリ岳西面 (下)

(一九五七・一月)

言頭卷

社会人と山と

笹田英次

「当会も今年が五年目。そろそろ情の黄色も消えて行く」という頃に
戻った。会のメンバーも社会人らしいのがふえて巾も興行も広がった
感じである。何か会が少しづつ大人になって行く様を喜ばしいけれど
半面総山行日数が減ってくるのは淋しい。御解りの事とは思うが、社
会人は家庭と勤務先という二つの社会の間にはさまっている。勤務先
の休暇で先ず制限され、その上たまの休暇も家庭などで制約されて山
に行ける日数は本当に少なくなってしまふ。そしてその少い日数を山行
に用いるならせいせい最大限に利用しようと思わざるを得ない。日数
が少いから山行の価値が少いわけではあるまい。少い日数でもその中
に充分内容を盛り込めば良いことだ。一般コースを歩いてても日帰り出
来る場所の数は知れている。ヴァリエーションルートを探して登れば
日数は少くとも充分に内容ある山行が出来る。たゞ単に登るより研究
の結果登るなら内容は更に高いものとなるろう。社会人に許される最も
手軽な山登りは机上プランである。これは他人に迷惑をかけないから
いくらでも研究し、たまに行う山行をより有効にすれば良い。あまり
日数とか回数とかの末業にとらわれずに、少い山行に最大の力を注い
だらその方がずっと良い事と思われ。社会人は体力的にも學生に劣

っている場合が多いだろうが山行前などは大切な自分の身体故充分な
攝生が必要だろうしそのことが却って普段の仕事にもプラスになる。
山を通じて身体を鍛えるのは學生の時代にやるのがせいぜいで、山を
通じて普段のコンディションを整えるのが社会人の身体に対する注意
だろう。

社会人がオ一線に立って山に行くのはむづかしい事であるがそつ
う人が出る事が望ましい。又誰がオ一線に立っただとしてもそれを育て
、いく気持を皆が持つことである。この気持が会全体に滲透した時こ
そ会というもの、存在意義がある。お互いがその特性を生かして助け
合つのが団体の良さといふことは、皆理解している事だろうが、立場
が変ると解らないことがある。人と人との交際の上に、和という言葉
と共に没我という言葉が必要である。「情は人の為ならず」といふ事
をよくいふが、たしかに眞理だと思ふ。自分の事はかり考える様では
社会人として成り立っていかないと、それをよしと思つても、口に出
すことも行つことも避けることを社会は強要する。我々の会も一つの
小社会である。家庭、勤務先、会等々いくつもの社会を自分の考えで
判切つていかねばならないがあくまでも他に迷惑を及ぼさない様にし
なければならぬ。

社会人となってからの山登りで自分の手で行えるものでありそれ
が頃のアマチュアスポーツであるし、そうやってこそ山に登る甲斐も
あるというもの。心の底から人を思い山を思い、いつまでも細く長く
登る事で、人を造り会を造りゐては我を育てるものと思われ。

— 山 行 報 告 —

51 スバリ岳西面

係 福 田

概説

スバリ岳は後立山の針ノ木岳と赤沢岳を結ぶ国境稜線上の顕著なピーク(二七三〇オ)であり、その西面には二本の岩稜と一本のザイテングラードが派出している。この三本は南側よりオ一、オ二、オ三尾根とそれぞれ呼ばれ(関西学生岳連二号、立大山西部々報、登山会報告七号参照)特にオ一尾根はその末端が黒部川にまで達して居り、「主稜」とも呼ばれる。又、オ二尾根は「中尾根」ともいう。各尾根間のレンゼは上部の傾斜に比して下部のそれは急峻であり、特にオ一、オ二尾根間のレンゼはそれがはなはだしく、山崩の最も生じやすい地形である。各岩稜はスツキリした岩で植生の侵入はなく、登攀の対象となる部分は、垂直距離一五〇米位であろうか。岩は鋭く、スダンス、ホールド共に豊富である。しかし花崗岩の特徴として、節理よりの分解は顕著で、大きなブロックとしてくずれることが多く、無雪期の登攀にはあまり快適とは言えない。

興味ある多くのルートを有しているので、今後開拓の余地は充分にある。取付点までの下降路としては、雪積期に於てはレンゼ使用が最適だが、夏期のオ一、オ二尾根間のレンゼは自然落石が多く快適とはいえない。

者は大体均一の急勾配であり、主稜に比して技術的に相当困難である。両者共北面より取付くのが楽であるが、南面にも多くのフランケがあり登攀の対象とはなる。これ等の尾根は、真正面から季節風を受けるために雪積期でもリッヂには雪が附着せず、陰になった部分に吹き溜りとなる程度である。

このスバリ岳西面が、後立山でのバリエーションルート登攀の一つとして会に持ち出されたのは春早い頃であったが、夏の事故等により試登段階に入ったのは一〇月であった。オ二尾根の試登は不成功に終わったが積雪期の完登を期して一月下旬四名にて荷上げを行った。以下はその報告である。(福田 宏 二 郎)

記 録

期 日・一二月三十一日——一九五七年一月一〇日

隊 員

田 中 典	23		
福田宏二郎	21	リーダー	(先発)
佐藤信治	23	会 計	
小田尚於	21	食 糧	
町 田 明	23	燃 料	
林 武志	21	器 具	(先発)
岡 谷 徹	21	10人装備	
鈴 木 潤	21	医 療	

一月三十一日（晴）

先発隊福田、林の二名がB・C整備及ルート偵察の爲入山する。大町より関西電力のトンネル工事場までトラックに便乗する事が出来た。

此処から大沢小屋への道が沢に入る所だ。杉大な荷物を半分デポし、スキーをつけて大沢小屋へ向う。二人ともこの谷は初めてとてルートが全く判らず左岸を高く登ったり沢に入ったり相当のアルバイトである。ラッセルはさほどではないがブッシュにザックをとられ、腕はずぶだるくなる。夕闇せまる頃小屋着。小さい方の小屋は雪が吹込み使用出来ず大きい小屋の中へ天幕を張り荷上の荷物の整理を行って一夜は必けて行く。

一月一日（晴）

元旦であることは判って居たが朝食はおじやの中に餅をぶち込んで完了する。直ちにスキーを履いてデポの荷を逆ボツカに向う。粉雪にスキーは快適だ。昨日のアルバイトが全く嘘の株だ。もう少し楽しみたいと思つて居るうちにデポに着く。シールをつけて再び登りだ。しかし昨日程のこともなく登前にB・C着。午後から国境主稜へのルート偵察に向う。小屋より直ぐ左岸の上にある急峻なルンゼへ入る。林木帯で雪崩の危険は少ない株だ。部分的にクラストしていてワカンではオソイ所もあるが、全体的にはワカンを履いた方が良い。ルンゼは狭く国境主稜より派生する尾根に吸収されていた。ここから主稜を見渡すことが出来、この支尾根が赤沢岳、スバリ岳の最低鞍部から派生して居るのを確認して居る。途中憩場はなまごうに見えるし、二つ憩

では、すでに高さ一〇〇〇米の半分位には達していると思われる。

（実は序ノ口であった）一番心配になるのは、それでもA・C-B・C間の往復時間だ。しかし国境へのルートとしては文句を入れる所がない。細い雪稜をしばらく登って見てB・Cに引き返す。

本隊田中、佐藤、町田、小田、岡谷、鈴木の六名新宿発。

一月二日（晴）

B・Cの二名は昨日のルートよりA・Cへの荷上げに向う。ルンゼ取付にてスキーをデポしてワカンに替える。昨日の引き返し地点まではラッセルのおかげでスムーズに進んだが、そこからは二人のラッセルでは相当にこたえる。東京での計画で一番問題となつたのは国境主稜のA・Cへの荷上げであった。ボツカを一挙に行るかどうかが計画全体の鍵でもあるからだ。だが中継デポを設けずに一気に一〇〇〇米の高度を荷揚げすることにする。従つて今日才三日目約十貫はどうしてもA・C予定地点までボツカすることが必要だ。絶え間ないラッセルは僅か五貫の荷にもかなりきつい。支尾根の中間鞍部で林が空身となつて福田がこれに縋く。主稜とのジャンクションの僅か信州野りのコルをA・C予定地点と定め、中間鞍部に残して来た荷を逆ボツカする。稜線は強風が吹きまくつて居たが、このA・C予定地点では無風状態である。帰路途中の雪壁（約二〇米位）にザイルをフィックスする。乗り越すのに二十分も福田がかつた所だ。あとはB・Cまで一目散に下る。スキーデポからは、さすがのスキーの福田も疲労の爲か転倒の連続、その土スキを折ってしまった。正月早々文句を云いながらB・Cへ帰る。

— 山 行 報 告 —

日没してから本隊が到着。急に小屋に活気が充ち全員にて喰うオデンの味は何に例えようか。(尚、先発隊の行動時間の記録は紛失した。)

(本隊) 田中(奥)、佐藤、小田、町田、岡谷、鈴木(洞)

大町(九、五〇)―大出(一〇、一〇〇)―二、五〇―大沢小屋(一九、〇五)

大町で百瀬氏宅に挨拶をすませ、出発する。ザックは予想外の重量だったのも大出にて廿数貫をデポする。途中で工事場行のジープとバスに便乗したがいずれも距離が短かく、殆どが徒歩であった。診療所を過ぎて、沢に入ったのは暮色せまる頃であった。沢は素晴らしい乾燥粉雪で猛烈なるアルバートを強いられる。谷間の日暮は早い。一時間位雪の中を泳ぐと、夜のとほりは氷重にも下されていた。待ちかねたが、心配したか先発の福田が迎えにくる。心づくしの熱い紅茶をキューッとひっかけ、自らの尻をタタいてラッセルを続ける。悪戦苦斗のあのオデンのカラシの胃にしみること。

去年以来？会はなかった先発隊との間に話の花が咲く。外では雪がチラつきはじめた。(小田 尙 於)

一月三日 (快晴)

①アタック隊・福田、小田

サポート隊・田中(奥)、町田、岡谷

BC(七、一五)―昼食のコル(二〇、二五)―一、〇〇―国境

稜線・AC建設(一二、五〇)―一四、三〇―BC帰着(一五、三五)

愚念されていた国境稜線への未登ルートも意外に簡単に我々の手に落ち、しかも昨日の偵察隊によって登攀用具は荷上げされたに聞き、正に計画はトントントン調子の感であった。だが予定しなかった逆ポッカ隊を三人出しているのが、今日の稜線荷上げは十二分とまではよかない。沢筋からはかなり強い風が吹きあげ朝日に輝く雪煙が乱舞する。

すっかり冷えきって未だ明けやらぬこゝ、箆川上流に、今日の機動部隊が出発した。大沢小屋より上流へ約三〇分程の所に右手より合流する約四〇度位の傾斜の沢が取付点である。昨日のラッセルが半分ほど残っているせいか難なく高度をかせぐ。西朋平に着く頃、風も鎮まって正に無風快晴となる。(西朋平) 前記の沢より尾根に出た約一八〇〇Mの地点で、天幕四張位張れる平坦地である。尾根が薄せて極端に左へ曲る頃、森林帯を抜け出した感じで、白一色が強調される。今朝の風で上部のラッセルは消され、その交代も回数を増してゆく。三

(4)

時間で到着な鞍部に到達した。南面に小さな凹地をもった昼食には好都合の場所である。穏やかな陽の中を再び出発。鞍部からは約一時間の激しい急登である。小田がやゝ調子を落したが、天候の良さとにらみ合わせるといかにも小事である。約二〇Mの雪壁は昨日偵察隊によってザイルが張られていたが、ACへのルートで唯一の難所である。稜線に近づく頃、木も無く傾斜が増して、雪崩が多少気になった。ACは国境稜線より約七M下の平坦地であって、後之山では例をみないほど恵まれた場所である。国境に立つと剽と立山が四季変らぬ美しそ

— 山 行 報 告 —

で我々の胸を痛めつける。四日目にして攻意態勢を整えた我々にスバリ西壁がその黒い肌を林々の形で見せてくれた。オ一次攻意隊の福田、小田と堅い握手を交して、サポート隊はBCへ下る。相変らず凜然と輝く太陽は今日を不慮のうちに終らせてくれたのである。五時間の登りも一時間でBCに戻ることが出来る。点々と赤布を結びつゝ、任務を終えた我々は一目散に下っていった。(田中 史)

②逆ボツ力隊 佐藤、鈴木(油)、林(武)
大沢小屋BC(八、一五)→大出(一一、〇〇)→一五、二五)→B
C(一九、三〇)

アタック隊、サポート隊を送り出し、朝食のあとかたづけを済ませる。スキー使用で、新雪の上に豪快なシュプールを残して診療所へ舞い下る。ここからは自動車道なのでスキーデポして歩く。大出までは空身の散歩。パッキングをして工事場行きの車を待たが、仲々来ないのでついにおきらめる。一人当り八、九貫。沢の中はシール無きためスキー使用せずラッセルは昨日と殆ど変らない。小屋ではサポート隊が志る古を作って待っていてくれた。(佐藤 信治)

一月四日

①アタック隊・ACでは風雪、昼頃より雪はやんで凧だけとなる。明るくなるのを待ってスバリ岳西面の主稜へ向う。稜線へ出ると風は相当に強い。黒部側よりの強風でまともに眼はあけられない。主稜

及びオニ尾根を展望出来る地点まで来る。それらは雪を殆んど付けていない。又国境稜線も黒部側はわづかの雪しかないので尾根への取付点までの下降の際に、心配された雪崩の危険は全く無い杯に思えた。(奥は主稜とオニ尾根との急峻な中間ルンゼに多量の粉雪が附着していたのだ)。風雪は一層強まった。未だ先は長い。今日はこゝで引返すことにした。午后サポート隊が登ってくる。「登れたか?」「駄目だ」。しかし久しぶりに全員そろっての昼食は楽しい。熱いコーヒーに舌顔をほころばせる。雪洞は食糧倉庫で肉、野菜、果物等とにぎやかに並んだ。(福田 宏 二郎)

②サポート隊 大沢BCでは朝晩は雪。最低気温零下五度。
BC(八、〇〇)→昼食のころ(一〇、〇五)→五〇)→AC(一
二、〇〇)→五〇)→BC(一四、一五)

サポート隊は前日の逆ボツ力隊を合流し、計六名となる。八、〇〇出発。本谷より西照平までの急登にエンジン火を吹く。しかしそこから急外稜にACへ到着。熱いコーヒーが我々を待っていた。帰路カモシカを望見した。BC帰着後スキーを楽しむ(佐藤 信治)

一月五日

①AC・風雪前日にも増す。昼頃より晴。凧強し。停滯。午后全員ACへ結集する。ナイロンテントに福田、小田、町田、関

— 山 行 報 告 —

谷。他に田中(実)、佐藤、林(武)、鈴木(潤)と配分する。

(福 田 宏 二 郎)

②BC(雪のち晴)六時-12

BC(九、一五)―昼食のころ(一一、三五)―一二、二五)―A
C(一三、三五)

昨日のラッセルは消え苦勞する。信州側にもか、わらすかなりの差
風。ACは更に強い風だ。太陽が出ているので雪面の乱反射がすごい。
晴れた冬の山は何物にも勝る。ACホッパ完了を祝し今夜はスキヤキ
の豪華版だ。一九時に夢下一五度を記録。(佐 藤 信 治)

一月六日

午前中風雪、暮頃より飛雪となり時々晴、夜になり風雪。六時-17

一九時-3

①アタック隊 福田、小田、町田、岡谷、

福田、岡谷がオニ尾根、小田、町田が主稜をそれぞれ登攀する予定
であったが、風雪でパーティの連絡がとれないので両パーティともオ
ニ尾根に向う。サポート隊は二、三時間遅らせて出発する標にする。

夏の後立縦走路をたどりオニ、オニ三尾根間のルンゼを下降する。この
ルンゼは雪が少く、雪をチョッピリさせてガラガラしたガレ場にするこ
ない。オニ尾根三峰下で福田―岡谷、小田―町田とアンザイレン。福
田は三峰側面のフェース、小田は右側のリッツよりそれぞれ取付きざ

イル左のばしたが、風雪ますます強く、また、く向にマツゲが凍りつ
いて盲目となり類はこわば。て声が出ない。わづかワンピッチにて登
攀は断念せざるを得なかった。(三峰側面は相当の悪場で上部は殆ど
垂直である)BCに帰るとサポート隊がまさに出発せんとしていた。
フブカれるのもよからうと赤沢岳へ向う。(福 田 宏 二 郎)

②サポート隊 田中(実)、佐藤、鈴木(潤)、林(武)

AC(九、〇〇)―赤沢岳(九、四〇)―五五)―AC(一〇、三
五)

アタック隊をサポートするためスバリ岳まで行く予定だったが、必
要がなくなった。切角身仕度をしたのだからというわけで赤沢岳を往
復する。雪煙がすごい。午後は雑談をして過す。

(佐 藤 信 治)

一月七日

風雪。停滞。六時-17。一三時-13。一九時-16

米、塩、石油の統制を徹底する。皆本格的な食慾で食うわく。

一月八日

晴。風は残弱まる。六時-18。一三時-11。一九時-17

AC(九、〇〇)―針ノ木岳(一〇、四五)―一一、〇五)―AC
(一一、二〇)

今までが一番寒い朝だ。予定通りキーパーに林(武)を残し會員で針ノ木岳を往復する。AC帰幕後視界開ける。夜は星空の下で最大なるデナーパーティを催した。(佐藤 信治)

一月九日

快晴差風。六時

①アタック隊 今日で本山行は終る。明日は下山だ。オニ尾根を放棄し、主稜へ福田・岡谷、小田・町田にて取付くことにする。風は相当に強いが今日までのうちでは一番弱い。主稜、オニ尾根間のルンゼを下降するも相当な急傾斜であり部分的にはすくもぐる。ⅢⅣのころより上部をトレスしようと思っていたがⅢⅢからⅢⅣへの下降時は急に雪量を増し、しかも表面は軽くクラストしているが内部は凝集力の弱い粉雪であるため、危険を感じて引返しⅢⅢのころめがけて主稜に取付いた。ⅢⅢのころへつき上げていく小さなルンゼも急峻で雪積まうかかなりスリリングな所だ。急ピッチで一氣にコルへ出る。心臓は爆発寸前であった。そこでアンザイレンして福田・岡谷が先行し小田・町田が少々遅れて取付く。オニ尾根をとると手の感覚が無くなるし、したまゝではホールドがうまくつかめない。はめたり、ぬいだり、口にくわえたり……雪は殆ど無く、アイゼンが邪魔になる。しかし小さなスタンスにはビブラムより快適だ。リッチ達しの登攀はかなり風当りが良い。岩は鋭く切れ決断な感融を察しむ。

△命をかけて恋するものを

なぜにつめたい岩の肌

アルプス一萬尺の一節を思い出しながら登る。途中一ヶ所ニードルをアプザイレンで下降する。部分的に脆い箇所がありそれが高度感の出る所と合致しているので緊張させられる。アプザイレンの次のピークは右側を捲き気味に上部に出んとするも悪い。もどつてリッチを直登したら見かけより安易だった。風がだんぐく強くなり冷たさとはげしくなる頃、遠松のリッチに出る。こゝでザイルを解き小田達の到着を待つ。サポート隊がスバリ頂上に現われた。小田、町田隊と共にスバリ頂上へ。

技術的な困難を伴う登攀ではなかったが、スバリ岳西面に冬期のトレスを行う事自体には意義があると思う。比較的弱い方だった。今日の風でさえ、我々の力がグッと縮小させられた事は一考を要する。この点については別の機会に論じたい。ともかく、いろくな事を各自帰途につきながら考えたと思う。

そして国境稜線には今もその問題の風が黒部川から吹き上げていた。

②サポート隊 田中(実)、鈴木(洵)

ACよりスバリ岳往復。

③テントキーパー 林(武)

④佐藤下山。

一月一〇日

丹雪、BC雪。

A C (七、二〇) — B C (九、四〇) (一、〇〇) — 白沢出合 (一三、五〇) — 岡電事務所 (一五、三〇) — 大出 (二六、三〇)

相当に荒れている。プロードの天幕は徹夜に一苦労だ。残り物に石油をかけ、出発前にして景気をつける。一週間もお世話になったA Cだ。なんとなく名残り惜しい。昨夜相当の降雪があったのでフィックスが埋るのを心配したが、すぐに発見出来た。屋根が急なためスリッパしそりであまりピッチが上らない。予想時間をオーバーしてB C大沢小屋に着く。「あわよくばトラックを……」という望みも溢れてくると共に雪はみぞれに交り更に冷たい。雨となった。皆ベンをかいて大出に着く。バスタトップ際の商店の御好意で火をどんく燃してもらい熱いお茶を御馳走になってようやく人心地がついた。

(福 田 宏 二 郎)

食糧係

今回の食糧計算では大きな誤差が出た。食糧が多すぎたのである。余ったのだから罪は不足した場合より幾分軽いかも知れぬが失敗に変わりはない。ここに先ずその原因をさぐってみることにする。

主食としては米食に主眼を置き、昼食として山行前半は食パン(蠟紙包装のもの)、後半は乾パンとした。ところで余ったのはこの米と乾パンである。米は一人当り一食一五合、一〇人一〇日の予定で三斗

購入し一月に燃料などと共に荷上げをした。ところがその後、各伯人の都合で総員八名となりしかも先発隊は二名しか出ず、残りの六名はまる八日しか参加しないことになった。こゝで山行終らずして九升ほど余ることが明白となった。それに加うるに、朝早くなどはあまり食欲がふるわず又伯人装より団体装として徴集した餅の雑煮ですませた事もあったので総計一斗二升ほどの残余が出た。又カンパンは山行後半の食糧及び非常食として余分を見込んでおいたので残るのは当然であったが、前述の如く参加人員の減少によって予想を上まわった。その他の食糧については計画より少しづつ多めに消費して下山までには丁度良く割りふった。

どこの山岳会の食糧係でも頭を悩ましている。馬力が出て、食欲をそり、軽量にして安価な食糧をという点に関しては毎度の爭ながら頭を痛めた。

献立は、朝が飯、みそ汁を基本とし納豆、卵、漬物(四種)、佃煮(三種)などのとり合わせで変化を加えた。これは「朝はあ。さりしたものを」という多くの意見をとり入れたのである。昼は山行前半には食パン、後半には乾パンを用いた。食パンは一〇月、一一月の山行で使用してみてかなり良好だったが堅くなるのを考慮して前半だけということにした。副食としてはレーズン、ジマム、マーマレード、ソーゼ、チーズ、バター、シカン、コーヒー、紅茶、ココア等を適当に組合わせた。しかしみかんはA Cでは凍結してしまったので行動食とはせず、デザートとして晩飯のあとなどに湯でとかして食べた。

— 山 行 報 告 —

晩飯は米食でオデン、カレー、シチュー、スキヤキ等を調理した。

献立表は作ってあったが、その日の行動や翌日の計画及び皆の希望も考慮して適当に変更した。

計算の誤差という大きな失敗はあったが、この点を除いては、この山行を通じて「餃子会館のラーメンを食いたい」とか「花馬車のコーヒーを飲みたい」とかという食物によるホームシックにかゝった者が一人も居らず、献立がかなりの好評であったのも、失敗を反省する反面秘かに自負しているのであるが諸兄の御批評、御意見等給われれば幸である。

(小田 向 於)

器具係

持参した器具は別表の通りである。特に通常と変わったものはない。ザイルは登攀用に三〇米を三本、フックス用に四〇米、三〇米各一本を用意した。フックスは一本のみの使用で足りた。又後線附近の降り口際試用の竹竿を一〇本持って行ったがその必要はなかった。石油コンロは三台持って行ったがやはり炊事時間の短縮のために、一テントに二台は必要である。テルモスは三ヶのろろ一ヶは使用不能となった。シートはデボに倉庫用に仲々便利である。大ナベ、ノコは日中用として持参した。

(林 武 志)

医療係

持参薬品は別表の通りで多量は二八七五円であるが、テラマイシン、トローチ、テラマイ眼薬、軟膏等は町田氏提供なので購入すればこれだけの費用では済まない。大病人なく薬品豊富であった。め多少風邪

薬、トローチを濫用した傾向がある。

薬品量及び種類については簡単に決しかねるが、この程度の準備で最小限のところと思う。今回の場合結果的には不明であるが、ビタミンB₁の攝取は必要であると思う。

(鈴木 潤)

リーダー後記

当会が公式冬山として北アルプスに入ったのは今回が初めてである。前年度の冬山八海山に於て豪雪を期待した我々は、意外の霧雪のため何か目的を失った感があった。そして今年度は風雪の後立山へ入ったのであるが、強風はいかなく荒れ狂い、我々にとっては良い試練となった。しかし岩場での強風が如何に苛酷なものであるかは身をもっていやという程思い知らされ、強風の前にオニ尾根を放棄したのである。確かに風は冷く強かった。それは現段階の我々の装備、技術をもってしての登攀は無理だと言いつける程の条件であった。しかし偶然にもこの強風に廻りわたるのではない。後立山の平常の風なのだ。後立山の西面には夏路が見えるということがこれを物語っている。又気象条件としては稀に見る晴天の連続だった。要するに良条件下に於てオニ尾根を放棄したのだ。ということは「会の精鋭をもって、後立山のバリエーションが登れなかった」という結論に到達する。今こゝでオニ尾根放棄の原因を考察するに、一言にして言えば先ず實力の不足、具体的に言うならこの様な強風に対する経験の不足だ。次に問題となるのはオーバー手袋である。寒風の中でこれを歯すことは直接凍傷につながるし、防寒用のこの厚い手袋では細いホールド等は思う程につ

— 山 行 報 告 —

かめず、ザイルワークもうまく行かない。是非行動に支障をきたさないオーバー手袋を考えねばならぬ。寒力と装備、我々にはこの両者とも不足していたのだ。

このオニ尾根の放棄は完全なる失敗だった。確かに独立的にこの冬山山行を見たならばそれで済むのである。しかし我々は常に進んでいる。この失敗を歴史的流れから見れば、我々の「強凡」という相手に対する偵察であり、次期への大切な資料である。この失敗を筆なる失敗に終らせてはいけない。

本年度冬山の最初のキーポイントとして注目されたA・Cの建設(B・C・A・C間に中間キャンプがあるかどうかということ)及びA・Cへのルート決定は多雪に見舞われたり、重量計算の大きな誤差による行動の変更にも拘らず計画通りに遂行出来たことは、先発隊のオニ尾根上げに口火を切った全員のファイトの報酬であろう。

高校時代より一緒に草山を歩いたことが俺達の自慢だった。そしてそれはスバリの冬山に強い絆となって現われたのだ。メンバーシップとは安易な条件のもとで云々すべきものではない。日頃四期生だ、六期生だとケチをつけ合っていた俺達だった。しかし悪条件下に於て、完全に一つの機械の如く動いた我々のチームは、メンバーシップは西朋の特色であり我々の誇りとするに足るものである。この山行をもつて大いに気を強くした次才である。

B・Cまでの荷上げは計算をはるかに上回った重量であった。各係とも過去の記録を生かし、より正確な計算を行つべきであった。特に米

の過多は眼にあまるものがあつた。荷上げ量と消費量との比を出しておくことは、今後の良き参考資料とならう。

B・Cまでスキーを使用した重量一三貫平均で傾斜ある立木向を登るのは現在の我々の技術ではマイナスであると思う。空身での連絡などに価値があるのは言うまでもない。

最後に結論としてこの山行は失敗に終つたと云い得るが、当初の公式冬山として、北アルプスに入つたことから得た種々の収穫は大であつたと思うし、困難に際してのチームワークの良さの再確認はこの失敗を償つて尚余りあるものと確信する。(福田 宏 二郎)

スバリ岳行動表

月日	天候	大町	B	H	A・C	山上
12.31	晴	2	→			
1. 1	晴		←	2		
2	晴のち雪	6	→	2		
3	快晴		←	3		
4	雪の中晴		←	6	2	
5	雪のち晴		←	6	2	
6	凡雪のち大雪				4	オニ尾根 未沢岳
7	凡雪				6	
8	晴				7	針林岳
9	快晴			1	4	主稜 スバリ岳
10	凡雪			7	2	

— 山 行 報 告 —

燃料表		団体装備表		
荷上量	消費量	品名	品名	数量
石 油 九(ガロン)	六	石 油 台 皿	石 油 油 皿	四
固 形 燃 料 一〇(缶)	七	マ ッ ト レ ス ツ エ ル ト	マ ッ ト レ ス ツ エ ル ト	一
ロ ー ソ ン ク 三〇(本)	二四	シ ー ト ザ イ ル (三〇×三〇) シ (四〇×三〇)	シ ー ト ザ イ ル (三〇×三〇) シ (四〇×三〇)	三
		ハ ー ケ ン カ ラ ビ ナ ハ ン マ ー ス コ ッ プ ナ タ ノ コ	ハ ー ケ ン カ ラ ビ ナ ハ ン マ ー ス コ ッ プ ナ タ ノ コ	二 一 三 二 一 一
		ポ ー (小) ナ ベ (大) 標 識 用 竹 竿	ポ ー (小) ナ ベ (大) 標 識 用 竹 竿	七 三 一〇
		テ ル モ ス 温 度 計 ブ ラ シ 包 丁 そ の 他	テ ル モ ス 温 度 計 ブ ラ シ 包 丁 そ の 他	三 一 二 一 二

スバリ岳西面		医薬品	
内服	外用	注射液	付属品
サイアジン ^{20Tb} 、テラマイシン ^{20Tb} 、サラマイトローチ、アナヒスト、アスピリン、セデス、ワカ末、メタボリン錠(B)	マーキュロ、ヨーチン、チンク油、ベナパスタ、サロメチール、テラマイシン眼薬、スマイル、テラマイシン軟膏	ビタカンファー注射液(10mg)(一〇本)	体温計、注射器一式、アルコール、バンソウ膏、包帯(5裂……2、4裂……2)、ガーゼ、三角巾、脱脂綿、その他

47 スバリ岳西面

係・小田

期日・一〇月一三(一六日)

参加者・(L)小田尚彦、町田明、鈴木潤

一〇月一三日(曇のち雨)

大出(七、三五)―大沢小舎(一〇、三五)

今年度冬山の目的であるスバリ岳西面及針ノ木岳周りを下検分する意味で出かけた。大出より扇沢あたりまでは、関西電力の工事のため

— 山 行 報 告 —

立派なトラック道があるという話だったがまだ進行中であつた。途中でトラックに便乗し白沢あたりまで移き一〇・三五に大沢小舎に着く。折からの雨のこととて予定通り大沢泊りとする。大出あたりでは未だ派手ではなかつた木葉もこらではもう真赤に身を焼きつくし早くも散つてゐるものさえあるのも今頃の山行ならでは見られぬ面白い現象だ。冬に登る縦走路への尾根をさがしに行くもガスが低くたれこめていて見るあたわず。雪溪を少し歩いて早繰とする。

一〇月一四日 (曇のち晴)

大沢小舎(六、〇〇)ー針ノ木小舎(一〇、五〇)ー二、〇〇)

ー針ノ木・スバリ岳往復(四時間半)

針ノ木の雪溪も一〇月ともなればこまぎれになっていて歩くのも楽じゃない。雪も無くなりガラ／＼の沢を歩き峠も近くなつた頃、雲がきはじめた。ワンピッチで峠の小舎に着く。 峠の

濁水を考慮してあらゆるものに水を詰めたがドラム缶に天水が半分程あつたので助かる。昼食後スバリ西面の尾根を眺めに針ノ木岳までブラ下げて出かける。二時間近くネバッタが累部側はガスで良い写真も撮れず、スバリ岳を往復して小舎に帰る。

一〇月一五日 (快晴)

針ノ木小舎(八、〇五)ースバリ岳(九・三五)ーオ三尾根(一〇、

一五)ー一・二〇)ー三峰引返点(一五、四五)ースバリ岳(一六、

五〇)ー一七、二五)ー針ノ木小舎(一八、二五)

上天気だ。雲はまだ谷底に眠っている。針ノ木のテッペンに立つと剣、立山はるか後立山は遠く白馬まで、銀座、裏銀座はその終点の槍まで、雲峰富士も遠くに浮び三六〇度の展望はほしいまゝである。スバリ岳を越えて少し下つた所から道をはずれてガラ／＼の斜面を下降。オ三尾根にて中尾根を眺めながら昼食。オ三尾根の下部をまいて中尾根の末端より取付く。草付上部にて小田ー町田ー鈴木のオーダーでアンザイレン。主稜、中尾根間はかなり大きなスケールで切れている。又そのルンゼに自然落石の音が絶えないのは、岩の脆さを物語っている。最初のニピッチは快適なチムニー登りだ。一昨日の新雪をまとつた立山、剣をチムニーの間から見るのは日本一の眺めだ。それから非常に鋭い嫌な登りだ。ニピッチでリッツに馬乗りになりコンテナアスもとりませて三峰下の道松のある広い所に出て尻を入れる。次にクラックのある感覚的にハング気味の所を越え三峰直下に出るも非常に脆くわずかのハングが強引には乗り越せない。ハーケンさえ利いてくれるといふのだが……下を見ると空間が、広い空間がありすばらしい高感度。悲壮な気持で再三試みるもダメ。仕方なく少しもどつて石にトラバースしてみるのがこれ本腕い。緊張した時間が続いたので時計も見なかったが、こゝだけで二時間半近くもねばっていたのだ。一五、〇〇遂に放棄する。小漕木のあるバンド状の所を下り気味にトラバースして中尾根、オ三尾根間のルンゼに出てスバリ岳へと馳け上る。雲海の彼方に陽の沈むのを見送ってから帰途につき月明りの中を

— 山 行 報 告 —

峠の小舎へ着いた。小舎は行方不明の人の搜索宿で二つだけあった。夕食後それをさけて小舎の外でふるえながらお月見をする。雪は再び谷底に降り、遠く槍ヶ岳のシルエツトがはつきりと月光に浮き出ている。星が異様にチカク瞬いていた。

一〇月一六日 (快晴)

針ノ木小舎(八、二〇)―蓮華方面引返点(八、四〇)―九、五五)

―大沢小舎(一一、四〇)―大町(一一、一五)

冬に登る後之縦走路への尾根と見つけるべく薄雪の途中まで登る。スバリ岳と赤沢岳の最低鞍部より信州側にのびるかすかな尾根に眼をつけ大沢小舎へと舞い降りる。雪溪の切れた所は岩に氷の膜がはりつきビブラムでの下降はいちいち氷をはがねばならないので苦勞する。大沢小舎より二時同歩いた所がトラックをつかまえ、凍ころんで大町まで。谷を抜けて平野に出ると後に山がグン／＼と広がってシネマスコープの林だった。空があくまでも青く澄んで「秋です。秋です」と言っていた。

大町で百瀬氏宅に寄り冬期の大沢小舎使用を御願ひし、今回の大沢針ノ木両小舎の使用御礼を述べる。(小田 尚 於)

48 丹沢ミズヒ沢
係・山中

期日・十一月二五日(雨)

参加者・(L)小田尚於、笹田英次、鈴木輝夫、山中富佐子、鈴木潤
大夫殿を演じてしまった。というのは、本山行は寄沢やまざわに入るつもりであつたのが中山峠への分岐点に材木が沢山積んであり、又暗くもあつて見逃してしまった。四十八瀬に入ったと気が付くまでに時間は大分過ぎており、水干沢をやることにする。以下はその報告であるが、この失敗は何とも弁解の余地無く大いに恥けると共に反省している。

(小田)

沢沢(〇、五五)―二俣小屋(三、三〇)―六、四〇)―ミズヒ沢
オニ堰堤(七、二五)―九、二五)―稜線(一三、〇〇)―一三、四
〇)―花立(一四、〇五)―沢沢(一六、四五)

沢沢竹ノ家で一台あとの電車で来た鈴木(潤)を待つて出発。二俣小屋まで右岸の道を行くがかなり荒れている。小雨が降ってきたので小屋で明るくなるまで仮眠する。六時半眼が覚めた時には殆んど雪でいた。永居は無用と一〇分で出発する。ミズヒ沢のオニ堰堤上で火を作り朝飯を食う。時折小雨がパラッいて面白くない天気だ。大棚は左岸を高捲くがこの捲道の最後の二米位ばかりはかなりのスリルがある。この大棚以外は別にとりたて、という程の事もない沢である。一月月末の沢登りはとても寒い。やはり沢は暑い時の方が楽しめる。空棚が続くのは進行も終りに近づいた事を物語っている。山中は久しぶりの山行のせいかかなり疲れている。我々も非常に空腹を感じている。やがて雨をゆるんだ方しを蹴込んで草付に出る。雨は風をま

じえて冷く強く降ってきた。稜線（鍋割の東側ピーク）に飛び出すともはや雨でなくみぞれが吹きつけていた。しかし、まよとばかりに五人立ったま、頭からシートをかぶり昼めしを食う。こうしていると風は当らず暖かい。みぞれにた、かれながら稜線の花文へ向った。笹の葉にわずかばかりの雪がついていて今近しを思わせる。ツル／＼の大倉尾根を快調なピッチで下り竹ノ家で解散する。
道を間違えたらえ雨に降られて気分が悪い山行だった。
（小田尚於）

49 八ヶ岳赤岳集中

係 岡 谷

期 日 一月三、四日

参加者 立場谷（L）田中 興、林 春彦

広河原（L）小田尚於、鈴木 洵

地獄谷（L）町田 明、岡谷 徹、飯塚康史

縦走隊 福田宏三郎以下現役

一月三日（曇、夜雪）

▲立場谷（田中（興）、林（春））

富士見（八、四五）—立沢公園（九、〇〇）—広河原、立場分岐（

一、〇〇）—一、四五）—ノロシバ沢出合（一、四、〇五）—岩小

屋（一四、一五）

一月の麓の空気は非常に冷い。褐色の田舎道を一番バスがのぼ

てゆく。冬支度を整えてすっかり落着き松ってしまった静かな山村を一番バスがのぼってゆく。麓の道はいくつにも分れ、その都度頭を使わせられる。だがいづれもアミダへ、アミダへとなびいているのである。诗情豊かな高原の晩秋は、私の欲する理想境を展向して、長くそして美しく続いてゆくのであった。広河原、立場の分岐で広河原隊としばしの別れに一本の美養（ヨクヤ）を分け合った。相変わらずない道路が立場谷に沿って続いている。旧伐採小屋を径は百度以上も右にぐる／＼と廻る。新伐採小屋辺りから河原に入ってしまった。二、三本の小滝が現われるが此処広い河原を持った立場谷ではちよ／＼としたアクセサリー程度である。谷は暗く、鬱蒼としたあたりりの木々と合わせると興秩父的である。身体がや／＼と入るチムニーを乗り越すと狼火場沢出合に達する。今日の探々である岩小屋は、こ、から約五分位で左岸に古城の炊な形で現われた。二十人も入れるほどの立派な洞穴で、環境はなによりも仙人並みの印象を与えるところであった。（田中 興）

▲広河原沢（小田、鈴木（洵））

立沢公園（九、〇〇）—立場、広河原分岐（一、〇〇）—一、

四五（一岩小屋）（一三、〇〇）—偵察（一五、〇〇）—一六、三〇（

重荷ではうらめしいこの八ヶ岳のアプローチも、今日はサブザック

でとばす。空は曇っているが心は晴々して晩秋の高原気分を味わって

いる。立場、広河原の分岐まで立場隊の田中、林の両先輩と同道する。

明日の一二時に赤岳へ全員結集のはずだ。落葉をカサコンと踏んで山

道にかゝる。セヶ月位前の天幕場を通過。春の広河原を思い出す。水

量は少く沢沿いに進行する。右岸より左岸に渡り一三、〇〇岩小屋に着く。内部は傾斜していてあまり快適とはいえない。昼食を攝つて明日のコースを偵察する。沢は積雪期と異なり非常に歩きにくい。一時向ばかり歩いて岩小屋に帰る。一七、〇〇少々早いのが就寝とする。重量制限のため一つのシュラフに二人で入る。スマートな二人とはいえかなり苦しい。それに外がまだ明るくなく眠れない。夜中、苦しくて何回も眼がさめた。疲れるので起きて休んだ。ふとライトで外を照らすと雨だ。面白くねえ。何回目に眼がさめたとき雨は雪に変わった。畜生ノ一服ツケベエ。ケースよりピースを一本抜いた。

(小田尚於)

▲地獄谷(町田、岡谷、飯塚)

清里(八、二〇)―美ノ森分岐(九、三〇)―川俣川東沢(一〇、一〇)―赤岳沢出合(一一、五〇)―三段ノ滝(一四、〇〇)―切戸(一七、三〇)

地獄谷隊は明日の集合には時間的に十分余裕があるので、のんびりと高原散歩。川俣川東沢に出ると水は完全に洩れいやになる様な河原歩き。この辺から大小多くの岩小屋が目につく。特に左岸に多い。時間には午前十時、まだ岩小屋に入り込むには早すぎる。もう少し緩々と腰をあげる。向もなく赤岳沢出合。これから先は本、支流の区別が難しい。目まかして権現沢出合を過ぎればしめたもの。本谷に入ると思に両岸はせばまり暗い感じの沢になり、水量もぐっと増す。緊する如く三段の滝はシャワー覚悟でなければ直登不能なので、濡れる。

ともあるまいと右岸を高捲くも、この捲き道かなり荒れている。この頃から天候が崩れだしたので、今日中に切戸まで稼ぐことに決めビツチをあげる。水量が多く沢筋を行く事は出来ない。右岸を捲くうちにツルネより発する尾根に出る。ツルネを越って切戸に着いたのは機電の欲しくなる頃だった。ツェルトにもぐってから雪がチラつきだす。

(町田明)

一月四日(快晴)

▲地獄谷(町田、岡谷、飯塚)

切戸出発(六、一〇)―赤岳(八、〇〇)

周囲の騒ぎに目を覚ますと三〇センチの新雪。心配なのは広河原隊のこと。昨日は寝すぎたのでゆっくりしたいが、ツェルトに新雪では目が覚めたらもうゆっくりしてられない。パンをかじって出発。赤岳の登りにかゝると新雪も三〇、四〇センチとなる。中岳のコルを二人のパーティが、良いピッチでやってくる。立場隊が広河原隊に遠くないと捲き道の中岳側にトラヴァース。コルを送ったが返事がない。暫く見守ったがあきらめて引返しトラヴァース途中からルンゼを直登し南峰に出る。集合場所赤岳小屋に入時着。誰も来てないらしい。それもその筈、集合時間よりもなんと五時間も早いのである。遅刻よりも罪は軽いとしても、ほめられたものではない。今更ながら集り登山の難しさを感じる。時間潰しに困り、夏沢峠から縦走の現役を迎えに横岳へ行く。

(町田明)

▲広河原沢 (小田、鈴木(洞))
岩小屋出発(六、二五)ーF4(八、一〇)ー南稜三峰ザッテル)
一〇・一〇(一〇、四〇)ー阿弥陀岳(一一、四五)ー赤岳(一三、
〇七)

前夜の雪はわずかばかりの積雪をみてやんでいた。青空が見えてはいるが山の面側のしかも谷向では全々陽が当らない。出発ノ
大きい滝で直登出来るのはなく、三月ならみんな埋ってるんだがとボ
ヤキながら右に左に高捲いて八時頃F4に暮く、時計と新雪をニラン
で、ニルンゼを放棄して南稜へ逃げる事にする。阿弥陀南稜の三峰よ
り西へ伸びる屋根(この屋根上には夏道あり)に取付く。パリエーシ
ョンの集中は無理だな、と考えながらガムシヤラに登った。夏道に出
て陽にあたり風を入れる。新雪をかぶった広河原の岩壁は心憎いまで
に美しく朝日に輝いている。ニパーテイばかり憩っている三峰ザッテ
ルにて小休止してめしを食う。八ヶ岳の裾野がきれいだ。アンザイレ
ンにて三ピッチほど岩稜を登り三峰上にてザイルを解く。あとは新雪
を蹴散らして阿弥陀岳へ駆け上る。アミダの下りで学校の先達に会い
立話する。時間はずっと気はせくがこの先輩仲々話をやめない。いま
りかねて「今集中をやってるんです」と時計を見ながら云うとやっ
と解放してくれた。半分馳足で赤岳へ。しかし七分の遅刻。すでに地獄
谷と縦走隊は来ていたが、一番早いと頷っていた立場隊が未到着。

(小田 尚 於)

▲立場谷 (田中(実)、林(春))
岩小屋(六、四〇)ー上説ゴルジュ(八、四〇)ー南稜無名峰(一
一、〇〇)ー阿弥陀岳(一四、三〇)ー中岳(他隊と合流)(一五、
一〇)

翌朝眼を覚ますと新雪がおりているのに驚いた。しばらくゆくと八
米の滝が現われるがこの前後の小滝と共に、倒木が唯一のスタンスな
のである。うっすらと雪をかぶった倒木に非常な苦勞をしようとした。
山刀で足場をけずってゆくより仕方なく時間を予想以上に費した。ガ
マ滝沢が右に現われ、その出合はすさまじい形で美しい滝を連ねてい
る。谷はようやく狭くなりゴルジュに入ってゆく。足を大事にしてき
たのであるが、遂に渡渉せざるを得なくなつた。真青な空が木々を通
してまぶしいばかりだ。やがて中二米ほどの最狭部に達し左右の岩壁
は数十米にも屹立してクライマックスにやってきた。言語に絶する深
谷美は自然の芸術家の最も傑出したものではなからうか。この奥の八
米の滝は水量の多い今、登高不可能である。左右兩岸が捲けるが下降
点が悪い。我々は右岸を高捲いていった。三センチ位雪が積っていて
捲道は失いがちだ。下降点に立つ辺り車付は雪をかぶって全く不安定
だ。ザイルを木にかけて、一人は下降にかゝったが、ダブルにする
と操作がうまくゆかない。我々はそのまゝ谷を見捨て、南稜に取付い
た。登集した木々を分け、しばし苔に足をとられながら、つらい急登
に消耗していった。無名峰につきあげたのは一時だったと記憶する。

足は水で濡らし身体は木から落ちた雪で濡れ寒に寒い。食事を済ませてから、南隣の岩峰にかゝった。P₁・P₂ は難なく過ぎたがP₃ は左に捲いてルンゼを送んだ。ところがこゝは氷を張りつめ、その上に新雪をかぶっているもので、すっかり行きづまってしまった。そろ／＼集合時間だ。気はあせるが進まない。五〇米足らずのルンゼであるがステップを切つては林さんに指示する。一時間二〇分を費して稜線に立つた。そこかいアミダはすぐであるが、すでに一時間半の遅刻である。アミダ、中岳のコレで明日勤めのある林氏と別れ赤岳に向つた。中岳で捜索に下りて来た仲間と会い、無事を知らせる事が出来たのである。全員の消息を聞くとす。かり安心してしまい。今日の苦行が骨身に伝えて来た。晩秋の陽はすでに傾き、鈍い光が蒸化粧のピークをクッキリと浮び出させている。

(田 中 典)

▲集中以後

赤岳発(一四、四五)→中岳(一五、一〇)→行者(一五、四〇)→五三(一美濃戸)一六、四〇→一七、〇〇)→八ヶ岳農場(一八、一五)

かみりの賑わいをみせた赤岳も、ようやく静かになりかけたが、立場隊は未だ来ない。現役に岡谷と飯塚をつけ一足先に下山させる。福田、町田、小田、鈴木(潤)の四人が赤岳で待つ。ルートとしては一番簡単と思われていた。パーティだけにこの遅刻は気になる。三時少し前、赤岳頂上に連絡紙を残し中岳へ向う。赤岳、中岳のコレにも連絡紙を置く。トップが中岳を登りきった時、立場隊の田中(実)氏が向

う側からふよ／＼こり首を出した。「オ、ミ／＼さん」というわけで大いに胸をなでおろす。話を聞きながら煙草に火をつける。一〇分程して先行パーティを追う。行者へ舞い下りて林氏と合流。美濃戸にて現役後発の北村、高山を拾い豊場へ。すでに陽は落ちて豊場の灯が光る頃、藍色の空にオリオン星座が鋭くまた／＼き、冬近しを思わせる。そつとビッケルをなでてみた。

(小 田 尚 於)

50 大沢小屋荷上げ

係 ・ 町 田

期 日 ・ 一二月三三(二五日)

参加者 ・ (シ)平沢 真、山口雄弘、長崎正躬、町田 明

一二月三三日 (晴)

大町(七、四〇)→物資集配所(八、〇五)→八、四〇)→工事本部(一〇、二〇)→一〇、四五)→大沢小屋(一一、一〇)

大町で大沢小屋管理人の百瀬氏に挨拶をする。石油購入の後岩小屋沢隧道工事現場に入るトラックに便乗すべく物資集配所に急ぐ。こゝでパッキングを仕直しながら待つこと三〇分、米俵を満載したトラックをつかまえて、途中二回乗換え終点の工事本部前に着く。こゝまで来れば小屋まで一時間半というところ。十ガロンの石油、二斗の米も何のその。工事人夫の怪訝な視線を受けながら笹川の河原を下りる。時々、「ドカーン」とハッパにおどかされつゝ中四米もある仮道路を行くと扇沢出合。こゝで沢筋にある大沢小屋への夏道に分れる。一〇

— 山 行 報 告 —

日ほど前に初雪があったと聞いたが当院にはまだ白く残っている。岩小屋沢出合を過ぎればやがてうすうすと新雪をかぶった熊笹の中の大沢小屋に着く。早速、石油、米等を床下に煙める。午後は天気が崩れだしたので小屋に沈没。早めにシユラフにもぐる。

一月二四 (晴)

大沢小屋(七、〇〇)ーノ沢出合(七、三五)ーガレ場(八、〇〇)ー八、一五)ーノ沢出合(九、四〇)ーニ隊と合流(一〇、三〇)ー一、一〇)ー針ノ木小屋(一四、一〇)

平沢、町田は冬の国境線までのボツカルートの偵察。山口、長崎は針ノ木小屋に向う。小屋の上に続く真道が本谷に下りた所へ左岸より合する沢(一ノ沢と呼ぶ)をつめれば一〇月偵察の折目を付けた尾根に出ると見た。山口、長崎と別れ、凍りついた石に足をとられながら沢登り開始。F2を越えると沢筋は左に大きく曲っている。石手の尾根を目指してガレを登る。しかしガレの上部に岩場が出てきたのでキスリングでは無理も出来ず振り出しへもどる。もう一本手前の沢に入るべきであったと分ったが時間もなく、猛烈なブッシュで登行は不可能と判断し、峠に向い山口、長崎を遡る。先月来た時はうす汚れていた雪溪も真白に化粧を済ませている。マヤクホの出合を過ぎると峠への最後の登り。こゝは黒部側から飛んで来た雪が溶るとみえて股下までのラッセルと相成り一汗かいて峠に着く。無風快晴、日本の景色に小屋へ入るのも惜しい。疲れ知らずの平沢、長崎が針ノ木岳に

出かけるが、途中で考之直して帰って来る。今夜はツエルトをかけたもやけに寒い。

一月二五日 (高曇り)

針ノ木小屋(七、一五)ー針ノ木岳(八、〇〇)ー八、一〇)ー針ノ木小屋(八、四五)ー一〇、〇〇)ー大沢小屋(一一、三〇)ー二、〇〇)ー大出(一五、三〇)

全員アイゼンをつけて針ノ木岳に向う。黒部側から飛ばされた雪で信州側は一米の積雪。夏の気味悪い自然落石の音もない。稜線に出ると黒部側からの猛烈な風、冬のスバリ西面の厳しさを考之させられる。風が強いで頂上も長居は無用と小屋に戻る。稜線から一步信州側に入るとワンの椽に風が無い。小屋の中を比づけて一〇時下山。大沢小屋に下ってくると人夫がこゝまで薪拾いに来ている。デポしたものがいさゝか心配。帰りは運よくトラックに拾われ大出へ。

(町田 明)

51 スバリ岳西面

係・福田

(本文三頁参照)

52 沼尻スキー合宿

係・山中

— 山 行 報 告 —

期 日 ・ 一 月 一 〇 六 日

参加者 ・ (L) 笹田英次、山中富佐子、平沢 勇、林 春彦、米野弘躬

松田朝夫、伊藤弘美、岩崎元子

変化の無いゲレンデ練習なので最終日の安達太郎越えの報告のみにとめる。

一 月 六 日 (晴 の ろ 霧)

旅館 (ハ、四〇) — 白糸ノ滝 (一〇、二〇) — 鉄山 (一三、二〇)

一四、〇〇) — 岳温泉 (一八、五〇)

今日まで残った笹田、山中、平沢、米野、飯塚にて岳温泉へ行くべく安達太郎山を越える。

合宿で全員腕をあげたので簡単に越えるつもりだった。今年スキーをはくのはじめての飯塚を最低線とふんで元氣一杯出発。午前中は天気良く雪はしまっている。白糸の滝まではスキーをかつぐ。鉱山事務所あたりより雪が深くなってきたのでスキーを借用するも思っただけには進まない。昼食を終る頃から濃霧が発生し谷から風が吹き上る。やせ尾根を鉄山目指して登る頃になると、ガス、風ますますくもどくピッチも落ちてがっかりする。しかし鉄山へ出るとパッと霧が消えて視界が開ける。小休止する。時間はおまわりないので直ちに下に見える小屋へ向って滑降開始。かなりの急斜面で仲々快適であった。小屋から「岳」のゲレンデまで行く途中で日が暮れ、転倒者続出、相当苦労して岳温泉最終バスにかけ込んだ。実力と体力の差がぐっと出て時間的ロス

が大きかった。

(笹 田 英 次)

特 塩 沢 ス キ ー 大 会

係 ・ 山 中

期 日 ・ 一 月 二 十 日

参加者 ・ 笹田英次、山口雄弘、平沢 勇、鈴木輝夫、佐藤信治、町

田 明、小田尚於、米野弘躬、飯塚康史、山中富佐子

(現 役) 中村乙丙、黒沢 隆、沢野 徹、木原哲夫、岡谷

興雄、関野道夫、(ゲ ス ト) 中山、鈴木、山口弟

十九日夜才一銀嶺にて塩沢に向け上野駅を出発した。明日は待望の腕(もしくは足)くらべとあって一同大いに張り切っていた。明けて二十日、兼ねて我こそはと心中鼻高々の天狗達にとって塩沢スキー場のコンディションは溺息ものだった。早朝のゲレンデはガスがふもどく視界がきかずその上雪が降っている。だが今日のレースに備えて全員練習に励んだ。しかし十時頃より気温が上りいつの間にか雪が雨に変わった。一月二十日と云うのに塩沢では雨が降っている。ゲレンデの雪もベタベタと解け始め思う様に滑れないのであきらめて昼食をとりゲレンデの状態を気にしていたがその内に天候もどうやら持直し靄空が時々靄を出す程になった。時間もあまりないので急いでコースの選定を行い、山口さんの指導のもとに旗門を立てた。かなり急なコースで特に下半分が急でその先が川になっている為もしり損じると大変

— 山 行 報 告 —

な事になりかねない。各自何回かの練習の後〇日、現役の区別なく順位を決め一人二回、その良い方の成績をとる事にしてレースを開始した。記録係山中・レース参加者十五名・全員が此の様なレースに慣れぬ為かかなり時間をとり亦全員が才二回目の滑降を終った後のコースを見ると旗門付近は大きな穴があき相当ひどく荒れていた、素直も二・三回あり現役の黒沢さんが一回目の滑降中スキーを折ったがどうやら無事終了した。その結果を次に発表するがストップウオッチがなかった為正確な記録がとれなかった事は残念な事だった。

- 一位 山口雄弘 十四秒
 - 二位 中村乙丙 十五秒
 - 三位 笹田英次 十八秒
 - 鈴木輝夫
 - 五位 小田尚於 二十二秒
 - 六位 平沢 勇 二十六秒
- 以下書

レース終了後記念撮影を行い残り少ない一日を各自好みのコースを送んで思う存分滑り堀沢のゲレンデを後に駅まで一気に下った。岩井先生より贈られたスチール・ストックをはじめとし数々の賞品を手にレースの話に花を咲かせて全員元気に帰路についた。

(山 中 富 佐 子)

53 八ヶ岳春山合宿

係・福 田

期 日・三月一九()二七日

参加者・(山) 福田宏二郎、町田 明、林 武志、飯塚康史、(松田) 稔

概説 三月一九日より二日までの四日向を西朋の合宿として、昨年不成功に終わった広河原奥壁のニルンゼを目指したが又もやF₂が東越せず失敗に終わった。また、二三日より二七日までは現役合宿のコーチにあたった。冬山での基礎技術、テントマナー等を教える。以下は西朋の合宿の記録のみであり現役の合宿は簡単にその行動を示すにとどまる。

(福 田 宏 二 郎)

三月一九日 (晴)

立沢公園(九、〇〇)ー広河原、立場分岐(一ニ、二〇)ーB.C) 一四、二〇)

富士見駅にてバスを待つ同睡眠もとれず、たゞなんとなく過ぎ。立沢公園にてバスを捨てアミダへ向う。雪は例年より多く道はかくれていて時々踏みはずす。ピッチをあげて、多雪による時間の食い過ぎを力グアーする。

造林小屋にて昼食、通常流水のある所なのに雪のため無いのには一

— 山 行 報 告 —

寸ガツカリさせられる。広河原沢に入りラッセル状態となるが、先行パーティのトレールがあったため、ワカンは付けずに済む。予定時刻の三時に、御小舎屋根上部へくい込む沢の出口に着く。そこより本流沿いに五分ばかりの所にBCを建設する。雪質は湿度なく、完全なる粉雪であって、テントの地固めには相当苦勞するも、巨漢飯塚の努力により一応固められる。

(福 田)

三月二〇日 (晴)

▲アタック隊 (L) 福田、松田 (稜)

四時三〇分出發、月が出ていた。ライトと月の光をたよりに広河原沢をつめる。南稜P₃より派出する尾根にくい込む急なルンゼ(我々は昨年それを西尾根及びルンゼと呼んでいた)のでこの記録でも以後そう呼ぶ事にしたい)このルンゼの下で、サポート隊と別れる。ルンゼまではかなりのラッセルが強いられる。今回はリッチェに取付かず、直接大滝を乗越せようと滝の真下まで行く。すばらしい靑水である。左岸を突破せんと試みるも雪のついてないがらくくのクラックは相当悪く、又セカンドの確保点も無い。こゝを諦め、少し右へトラヴァースし、フェエス₂を乗越してこの大滝を捲こうと再度試みるも、岩が脆くてハーケンが利かず失敗に終る。そのまゝ、なおも右へトラヴァースし、ルンゼ及びルンゼ左股の中間リッチェに登り、再びルンゼへもどらうと偵察するが良いルートなく、一息入れて昼食とする。サポート隊は南三峰にとり付いている。昼食後再び右側へトラヴァースして皿

ルンゼ左股に入り四峰附近に出る。アミダ頂上にてサポート隊と合流し大休止のち全員歸路につく。ルンゼの右股を下降。

(福 田 宏 二 郎)

▲サポート隊 (南稜) (L) 町田、林 (武)、飯塚

BC (四、三〇) — Eルンゼ下 (五、五五) — 三峰ザッテル (七、三〇) — 八、三五) — 阿弥陀岳 (一〇、〇七) — 一二、〇〇) — BC (一四、一二)

アタック隊と別れルンゼに入る。腰迄のラッセルでやゝ苦しい。昨年より確かに雪は多くルンゼをつめて稜線に出ても膝上から腹迄のラッセルで、三峰近くの石楠花帯に入つてようやく解放された。ザッテル₂飯を食い、リッチェに取付く。トップ町田、風が強くじょとしているのがつらい。岩には雪がついていらず昨年にして案である。取付がやゝ注意を要するのみで大した事は無く、飯塚、林と続く。この時広河原隊のII・III向リッチェに居るのを認め、どなる。どうやら失敗らしい。三峰からは適当にしまった雪を踏んで行き、四峰は左側に捲いて、本峰直下の雪の詰まったガリーを蹴込んで頂上に立つ。数人の先客が居た。頂上に雪洞を掘るべく、スコップを持参せるも、積雪わずかに一米、風避けの穴を掘るにとどまる。アタック隊を待つ向、靑空に飛び行く雪を眺めていた。風は強く広河原から吹き上げる。

(林 武 志)

三月二日 (晴)

▲アタック隊 (L) 畠田、林 (武)

BC (四、四五) — エルンゼ出合 (六、一〇) — 阿次陀岳 (八、四〇) — 九、二五) — P₃ (九、三五) — BC (一〇、五二)

エルンゼ出合でサポート隊の福田、飯塚と別れる。しっかりしたトールがあるので、ピッチはあがる。エルンゼのFは右を捲き、E・

IIルンゼの中間校に取付く。岩の下まで来ると雪は無くなり、脆い草付となる。こゝでアンザイレンする。右斜に五米登るとテラスがあり、更に五米直上して這松のアレートへ出る。こゝでサポート隊の姿を見付け、連絡する。こゝからIIルンゼに下降しFに取付く。不安定な場所なのでジッヘルが困難だ。二米ほど登るとクラックは刃れてホールドが無くなる。岩が脆く、ボロく崩れて、セカンドは頭から泥をかぶる。手のつけようがないので一旦雪面に下りて、右にトラウヴァースして捲こうとするも適当なルート無く、II・III間リッヂを乗り越してIIIルンゼ左股に入る。凧が強くて、さかんにガタがくる。サポート隊よりも先にアミダ山頂へ着いた。結局、今日も失敗に終わった。

(林 武志)

▲サポート隊 (南稜) (L) 福田、飯塚

なれない勉強をすぎたためか、体の調子の悪い私田 (稔) をキーパーとして残す。エルンゼ出合でアタック隊と別れ、昨日のサポート隊と同一ルートをとる。凧でラッセルは所々消えていたが、それでも

割合案だ。しかし凧は相対に強くかなり応える。頂上の吹さらしでアタック隊を待つのも能が無いと思ひ、南稜をアタック隊と歩調を合わせるべくゆっくり登る。三峰は左のルンゼを登り、上部にて昼食。頂上に着いたら、アタック隊はすでに到着していた。ヒナシノ、帰路は三峰よりIIIルンゼ右股を駆け下る。(福田 宏二郎)

三月二日 (凧雪)

BC 撤収出発 (七、三五) — エルンゼ出合 (九、二五) — 五〇) — 三峰 (一一、五五) — 阿次陀岳 (一三、〇〇) — 一三、二〇) — 行者キャンプサイト (一四、〇〇)

明るくなってからテントを撤収して、行者へ入るべく南稜を越す。トールは雪は埋って居り、又先日までのサブとは異なり大きいガックがあるためエルンゼの出合までに倍の時間を費す。こゝで昼食にするも凧強く寒気は強いいため、食物がろくに胃袋に入らないうちに身体が微小なる震動を始める。エルンゼの登りは相当なアルバイトだ。おまけにビッケルのシャフトが長めだったので腕が馬鹿になる。三峰のルンゼは心記した程の辛もなく通過。頂上直下のトラウヴァースは三〇米ザイルをフィックスする。アミダの頂上から行者まで一気にとばす。(福田 宏二郎)

現役ハケ岳合宿概略

参加者：(現役) 黒沢、蟹沢、岡谷 (興)、木原、杉浦、今井、沢

— 山 行 報 告 —

野、田中（康）、駒井、（コーチ）福田、飯塚、町田、平
沢、長崎

三月二三日

① 福田、飯塚、町田は前日までの合宿に引き続き現役コーチに当るため行者にて休養。

② 長崎以下現役九名行者入り。

③ 林（武）、松田（稔）下山。

三月二四日

① 黒沢を除く全員は、赤岳—中岳のコースでアイゼン及びピッケルワークの訓練を行う。

② 黒沢下山。

③ 平沢行者入り。

三月二五日

全員で赤岳登頂し、福田以下現役四名は赤岳—中岳コースに幕営。他は行者帰幕。

三月二六日

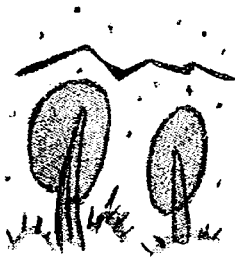
① 福田以下四名は行者帰幕。

② 平沢以下は阿弥陀岳往復し行者帰幕。

三月二七日

撤収し全員下山す。

（ 福 田 宏 二 郎 ）



現役情報

現役山岳部近況

笹 田 英 次

昨今登山ブームとやらでこの高松山岳部も活況を呈しているらしい。西高山岳部も御多聞に漏れず昨年は二、数年間では稀な二〇名近い入部者があってスタートは上々、新人歓迎会に川乗山へ行った〇B連中の目をみはらせた。そしてそれ以後西高山岳部独特のコーナングが行われた。それも最近低調になった西高山岳部の再建という夢をのせて熱心に行われた。そしてその結果順調にしかも落伍者も少なく夏山を迎えるに至った。私も四、五、六月と山行を共にし現役の、特に一年（現在二年）の熱意が感ぜられたし、八月の山行が楽しみにもなってきたけれど好邪魔多しとでもいうか八月の山行が思わぬ事故を伴ってしまった。その事故の原因、経過はともかくとしても私達に与えたショックは大きかったしそれにも増して現役に与えた影響は大きく、数ヶ月間の山行は秋に二回、正月にスキーをしたにすぎなかった。単

に山行だけでなく現役諸君、父兄、学校側にも与えた精神的影響も大きかったし、廃部とか退部とか色々な事が言われたが、〇B、現役の熱心な努力が実を結ぶ、その上学校、及父兄の理解もあって部の存続は認められ多少の行動の制約を受けるだけにとどまり、一年主の方は雨降って地固まる如く団結は一層強いものとなった。冬山は父兄、〇B、現役等の討論により基礎訓練のみを行う事になり五七年度を期して父兄に理解協力を求め、学校側にも要請し現役にも盛り上げる力を起す杯に勤めた。めか、今年こそはと思わせるに至った。

では今年度はどうであるうか。願向は平山（清）、岡崎、篠崎、平山（良）、中沢の諸先生である。長期山行や危険と目される山行以外は許可して頂き、且つ四月から一月迄は各山行を共にして下さる事となった。又現役も二年が中心となり十数名の新人を迎え、山行計画も西朋と共に考え共に行える様に計画され五六年度の事故にもめげず前途明るい出発をしている。定例の新人歓迎会も去年と同じ川乗山で行われた。三年は受験準備でもかくとして、二年の「ダース」にも及び部員の熱心な運営と西朋の協力によって今年こそその意気高く技術的にも精神的にも優秀な部員の繰出が期待出来るし、五六年度の初頭に希望した山岳部再興もはや時間の問題の感はあるが、この様な時にこそ大いに〇B連の力を必要とするので、山行を共にする事は勿論普段に於ても、大いに指導して頂く事をお願いして現役近況報告とさせていただきます。

野宿賛

J · S

coucher à la belle étoile というフランス語がある。

sleep under the beautiful stars 即ち、「美しい星のもとに眠る」というわけである。誰と？ そんなことは書いてない。要するにビヴァークすることだ。残念なことに日本の言葉にはこんな綺麗な修辭法がない。「オカンしたいなど」といっても、山に行かない人には何のことやらわからない。「山じゃ寒いのをオツに一本つけるんですかねえ」などと云われそうだ。それに又「昨夜はあの壁でつまって美しい星のもとで寝たんだよ」なんてまじめに語ったら「あいつはキザな奴だ」さもなければ「これだよ」と指で脇天を示すことになる。勿論 *romantic* という単語もチャンとあるが、それにしても洒落れに表現法のフランス語が面白いと思う。

もっともオカンしたっていつも美しい星の下とは限らないだろう。吹雪が来たり、雨に叩かれでもしたらロマンチックも何もありません。憎き空のもとに泣き入りということになって、一層悪い時には眠ると凍死ということもある。要するにビヴァークは明日の体力を培う休養として考えるべきだが、それにしても安全を確保出来る状態のところで、山の中で若小屋や岩稜のかけで寝るのは素直だ。

いつか一人で島々谷で寝た時は雨が降って身体にあたる点滴の音で

何度も眼を覚ましたが「河原の箇の中を螢の飛ぶ交いたるいとおかし」であった。

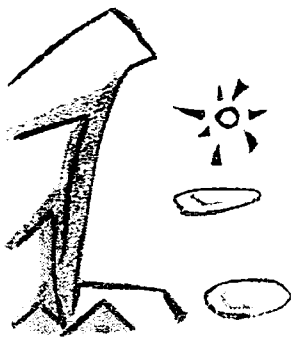
「野宿をするとき夜中に必ず魔術の杖に目を覺まして、遠い物音に耳をすます一刻がある」といつのときスチーブンソンの「ロバとの旅」の一章で読んだことがある。予備校のテキストだったとはいえ、断然うれしかった。

山登りで野宿をするのは手段であって目的とは云えず、それも止むを得ない最後の手段であることが多い。しかし一旦すると決ったら、尺雪の中でも豪雨の中でも少しでも安全に快適にやれる技術を深く得たい。

「夜を如何に楽しみつゝ過すべきか？」

これがきわもの、椀に聞える人間は效うべくもない蒸しき人間だぞお。

(「じんろく」より)



堆 積 抄 (1956.10.29~1957.3.31)			
	山 名 ()内は公式山行	月 日	備 考
1	大菩薩峠	1956.11.1	飯塚(単独)
2	(49)八ヶ岳集中	11.3~4	田中(実), 林(春), 町田, 関谷, 飯塚, 小田, 鈴木(瑠), 福田, 他山岳部員多数
3	北岳—塩見岳	11.20~26	川口他
4	(50)針ノ木岳	11.23~25	平沢, 町田, 山口, 長崎
5	(48)丹沢水干沢	11.25	笹田, 小田, 鈴木(輝), 鈴木(潤), 山中
6	長沢背稜	11.20~22	山口他
7	コイカクサカ岳	11.23~25	田中(将)他(北海道日高山脈)
8	万座スキー	12.25~30	山口他
9	赤倉スキー	12.20~22	林(武)他
10	五竜岳—白馬岳	12.22~30	川口, 田中(将)他
11	(51)スバリ岳西面	12.31~1.10	福田, 林(武)
		1.2~9	佐藤
		1.2~10	田中(実), 小田, 関谷, 町田, 鈴木(潤)
12	(52)沼尻スキー合宿	1957.1.1~6	笹田, 山中, 平沢, 米野, 林(春), 松田, 岩崎, 伊藤
13	石打スキー	1.1~4	鈴木(輝)他
14	熊ノ湯スキー	1.4~9	山口他
15	志賀高原スキー	1.9~10	川口他
16	沼尻スキー	1.15~17	山中他
17	石打スキー	1.17~18	鈴木(輝)
18	(特)塩沢スキー大会	1.19~20	小田, 飯塚, 平沢, 町田, 佐藤, 他
		1.20	米野, 山中, 笹田, 鈴木(輝), 他
19	塩沢スキー	2.2	米野 他
20	蔵王スキー	2.6~10	佐藤, 町田 他
21	美濃・粟峯スキー	2.11~15	鈴木(輝)他

— 推 積 抄 —

	山 名 ()内は公式山行	月 日	備 考
22	塩沢スキー	1957- 2.16~18 2.16~17	小田, 飯塚 他 米野
23	塩沢スキー	2.17~18	成瀬 他
24	白高山脈	2.20~3.17	田中(将), 川口 他
25	蔵王・八幡平	2.23~3.6	高橋 他
26	坂戸山現役訓練	2.23~24	笹田, 佐藤, 小田, 町田, 林(春), 鈴木(潤), 他山岳部員多数
27	石打スキー	2.25	佐藤, 町田
28	八甲田及蔵王	2.24~3.3	山中 他
29	石打スキー	3.2~3	松田 他
30	遠見尾根	3.4~6	小田, 長崎
31	塩沢スキー	3.5~8	福田 他
32	丹沢主脈	3.7~8	田中(実) 他
33	石打スキー	{ 3.9~10 3.10	町田, 林(武) 松田
34	川 乘 山	3.10	林(春) 他
35	(53)八ヶ岳合宿	{ 3.19~27	福田, 飯塚, 町田
		{ 3.19~23	林(武)
		{ 3.23~25	長崎
		{ 3.24~27	平沢
		{ 3.23~27	山岳部員9名
36	草津スキー	3.26~28	山口 他
37	大菩薩峠	3.31	田中(実)

編集後記

冬山の記録を整理してようやく落着いたと思つたが世の中はやはり夏山シーズンと相成つた。いろいろな事に忙殺されたとはいえ、夏に冬山報告を出すのは何となくはずかしい気もする。それにつけても最近はその聖つのが早く感ずるのは私だけだろうか。

x x x

今回は西朋初まって以来の「写真版ページ」がある。共に正月のスバリ岳で撮つたものである。製版、印刷は米野氏の御好意によつた。深く感謝の意を表したい。

x x x

ある女性からの手紙

「新緑っていいですね。こんな時アルピニスト達は一分でも無駄にしたら損しちゃう様な気持ちでいるのでしょね。貴方もどう？」

青菜の匂いをクンクンかきながら、どこまで、も行ってしまひそうですね。三々」

諸君。この新緑の季節を無駄にしたら損するぞよ。

(小田)

31年度決算報告

(自昭和31年4月1日
至昭和32年3月31日)

一般会計

(収入ノ部)		(支出ノ部)	
30年度繰越金	4600	通信費	3384
30年度未納会費徴集分	4700	会報発行費	7400
31年度会費	27600	器具費	17670
31年度入会金	600	医薬費	1400
雑収入	982	諸印刷代	3200
		雑支出	1400
		残高	4028
合計	38482	合計	38482

禮対特別会計

(収入ノ部)		(支出ノ部)	
30年度繰越金	6300	塩出君関係費	7500
30年度未納金徴集分	890	残高	9218
収入金	山行 2890		
	集會 6440		
銀行預金利息	198		
合計	16718	合計	16718

昭和三十二年五月三十一日発行

西朋報生口 一二号

都立西高山岳部OB会

西朋登高会

事務所・東京都中野区大和町一八〇 田中方 TEL. 〇八七五 (38)